

ブリランテ往復書簡

～稲田明理先生から井上眞理先生へ～

眞理先生へ

私が4回生で京都大学大学院の受験勉強と卒業研究の両立が大変だった頃、先生と出会い励まして下さいました。1年だけの在籍でしたが、先生はあの頃から変わらないう大きな存在です。

医学研究を始めて、もう20年。自分の好きなことをしていると、あっという間に過ぎました。道に迷ったら、「好きなこと」は何かを考え、その方向へ進んで下さい。それは一生変わらないから。私にとっては、生物・体のしくみ・組織でした。



お気に入りの癒し写真。

尊敬する人

恩師、先輩の存在

就職先の教養部で出会った恩師。そして、伝統ある作物学研究室に呼んでくれた当時の教授。教養部で一緒だった先輩女性教員の存在も、教員として仕事を続けていくことに対する自分の意識を変えてくれました。ロールモデルとなる人たちが、普通にいるということが大事なのだと思います。

わたしの
おとも

ピンクの電子辞書

娘がプレゼントしてくれました。色が気に入っています。音声翻訳機能付きで、韓国を旅行した時にはとても役に立ちました。偶然ですが、お気に入りのカメラもピンクです。



休日には…

休日も植物に囲まれて

1年前に古い家を取り壊して畑を開墾しました。半分は花園、もう半分は菜園にして、いろいろな植物を植えています。日曜日ごとの畑仕事と、ときどき遊びに来るノラ猫との出会いが楽しみです。

幸せなとき

大きな幸せは研究室に、 小さな幸せは庭に

論文が受理されたとき、卒業生が遊びに来てくれたときが大きな幸せ。小さな幸せは庭と畑にあります。植物の芽が出たとき、すくすく伸びたとき、花が咲いたとき、実ったとき、子猫が遊びに来たとき。種を蒔いていたワイルドフラワーがひと冬を越えてすくすく伸びて、いったいどんな花が咲くんだろうと思っていたら、今朝とてもきれいなバラ色の花を咲かせていました。幸せな瞬間です。

大切なことば

～マジック・ワード～

一寸先は光

このためには期限の1週間前までに目標の80%を終えることが大切。意志があるところに道は拓けます。

▼ 農学研究院

いの うえ まり
井上 眞理

教授

Profile

熊本県立第一高等学校、九州大学農学部農学科卒業。農学博士の学位取得(論博)。九州大学教養部教務員、助手、助教授(生物学)、農学部助教授(園芸学)、農学研究院助教授(作物学)を経て現職。



今年は農学研究院の評議員と副研究院長を兼務。女性教員の評議員選出は初めてです。

キャリアパス

赤タマネギとの出会い

小学校の卒業文集には、死ぬまで植物に囲まれていたいと書いた記憶があります。横浜の中学校のクラブ活動で訪ねた平塚の農業試験場で見た赤タマネギに感激して農学部に行こうと決めました。就職先で出会った恩師から「生きた証として論文を書き続けるように」と導かれ、研究を重ねていきました。2人目の子どもがお腹にいるときに博士号を取得しました。子どもの病気など大変なこともありましたが、恩師や家族の支えで研究を続けることができました。子どもの笑顔は何よりも原動力にもなりました。

これが魅力☆

目指すはノーベル平和賞

これまで芽生えや花、果実を研究対象としてきましたが、作物はさらにそれらが種子となったもの。いい子実を収穫するための栽培も大変。学生たちには「ノーベル平和賞を目指さない」と話しています(※)。

(※)作物学では、1970年にノーマン・ボーローグが「緑の革命」でノーベル平和賞を受賞。背が低く倒れにくい小麦を作出し、収量を向上させた。

わたしの研究

環境ストレスと作物

イネ・ムギ・ダイズ・ササゲなどを使って、地球温暖化をはじめとする環境ストレスに適応した作物の生理的なメカニズムを学生達と調べています。環境ストレス下でも、作物の収量や品質を維持するための基礎的な研究が中心です。九州地方の稲作は、温暖化に対する危機感が早くからありました。品質低下に関する分子レベルでの研究に加えて、栽培、収穫を行い、どの程度収量が落ちるかも調べます。ムギの研究では、収穫直前の降雨により発生する糖発芽(穂の中で発芽し、胚乳デンプンの分解を促進)には、活性酸素が引き金となっていることを明らかにしました。

また、ダイズの子実の発達やササゲの乾燥耐性にオートファジー(タンパク質を分解して必要なところに運ぶこと)が関わっていることなど、農学研究は宝の山がいっぱいです。

